

『米利堅平本常用方』中に現れる人物の特定について

高安伸子

へボンは明治二十五（一八九二）年十月二十二日に日本を離れたが、昨年（一九二二）の十月二十二日で百年が経過した。医療、聖書の翻訳、宣教、へボン式ローマ字など多彩な足跡を残したへボンの生涯全般及び医師としての活動については、長年にわたり様々な方面から研究報告が示されている。医学の立場からも、大滝紀雄氏らをはじめとして多くの報告がなされていることは、周知の通りである。演者も昭和六十三年の日本医史学会九月例会及び平成元年の第九十一回日本医史学会総会において、エーザイ内藤記念くすり博物館所蔵の『米利堅平本常用方』に含まれる明治三（一八七〇）年陰曆七月十二日からの横浜に於いての日誌とされる部分を元に、日本でのへボンの

医療内容やへボンとD・B・シモンズなど他の来日外国人医師との交流についてを報告した。今回は『米利堅平本常用方』と、他に示された事実による『米利堅平本常用方』日誌部分に現れる人物の特定についての考察の結果を報告する。

前回の報告においても述べたが、この日誌部分には外国人医師の名前としてへボン・シモンズ・ヨムパン・マイルという四名が書かれ、日本人医師の名前として貫齋・秀英の二名と「我」との記述があった。つまり、この日誌の筆者が「我」という人物であり、彼はへボン施養所にいた門弟の一人である可能性が強い。しかし、へボン施養所にいた門弟のリストというものは現存しておらず、貫齋・秀英の二名及び日誌の筆者か誰であるのか、今の段階では特定することができていない。貫齋という人物が、表記に使用された文字は違いが佐藤泰然の門人であった関寛齋である可能性について触れておくと、関寛齋は明治三年当時、横浜には住んでいなかった。また、関寛齋がへボンに師事していたという事実も確認されていない。唯一、『浜口梧陵伝』にへボンに師事していたとの

記述があるが、これは著者がポンペをヘボンとを思い違
つて書かれた全くの誤記であると考えられることから、
関寛齋を『米利堅平本常用方』に記された「貫齋」とす
ることは無理があると思われる。

次に、ヘボンを除くシモンズ・ヨムパン・マイルの三
名の外国人医師が誰であるかの特定であるが、シモンズ
がD・B・シモンズであることはヘボンとの関係からす
でに明らかとなっている。ヨムパンは、佐賀県立病院・
愛知県病院などの御雇教師ヨングハンスであると、佐賀
県立病院関係史料に含まれるヨングハンスに関する書類
の調査及び荒井保男氏が発表された、シモンズとヨング
ハンスに関する論文によって、ほぼ特定してよいと思わ
れる。残るマイルについての特定は、年代的な疑問から
できていない。横浜オランダ海軍病院にいたマイエルで
あろうとの推測もあるが、マイエルは佐藤泰然の手紙か
ら明治二年に死亡していることが明らかになっており、
マイルの名前の現れる日誌部分の記述が、確実に明治三
年に書かれたものであると仮定すると、オランダ医師マ
イエルであるとは言えない。しかし、「日誌部分」は冒頭

に日誌と表記されていても記述の全体に日付が残されて
いるのではなく、処方や処置の覚書きのような項目も含
まれている点や、マイルの名前の現れる記述には日付が
ないため明治三年以前であることも考えられるが、ヘボ
ンが横浜居留地三十九番で施療所を開いたのが明治二年
九月であり、シモンズの再来日の時期が明治二年末頃と
される点から、マイエルの明治二年死亡が事実であつた
とすると、この場合も特定することは早計であると思わ
れる。

この他にも、現在の段階で得られた考察の結果をいく
つか報告したい。

(順天堂大学医学部医史学研究室)